慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	初産婦の産児に対する感情の時系列的変容 : 3事例の日記をもとに
Sub Title	Psychological changes of primiparous women toward their children : analysis of three cases of their diaries
Author	柴原, 宜幸(Shibahara, Yoshiyuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1993
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.38 (1993.) ,p.59- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000038-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

初産婦の産児に対する感情の時系列的変容[1)]

——3事例の日記をもとに——

Psychological Changes of Primiparous Women toward Their Children

—Analysis of Three Cases of Their Diaries—

柴　原　宜　幸*

Yoshiyuki Shibahara

This study was to describe the psychological life of the primiparous women with their diaries from delivery. This paper especially analysed their feelings for their newborns of three cases.

It was, on the whole, recognized that a series of change processes proceeded along

1) a period of unconditionally positive feelings for their children themselves,
2) a period of feelings for them through child rearing, and
3) a period of feelings for them toward behavioral development of them.

And, at the end of the first year, two of these cases had the tendency of

4a) cognition of the necessity with discipline, and/or which of
4b) the concern for education.

The difficult aspects of child rearing are emphasized, today in Japan, in contrast with the delightful one from some disciplines. A variety of psychological development of mothers (or parents) should be empirically scrutinized.

一般的に女性は，妊娠・出産という経験を経て，母親と呼ばれるようになる。しかし，妊娠・出産という経験を経るだけで，母親としての自覚が促され，それに基づいた行動様式を獲得し，産児に対して，母親として有能に機能し得る，とは限らない。このことは，産褥期精神障害や育児ノイローゼ，産児虐待の症例（例えば，ペリネイタルケア夏季増刊号，1986）が示すところであり，また，昨今の妊婦雑誌や育児雑誌の隆盛が，社会的需要として物語っているところである。もちろん，妊娠・出産という一連の経験要因が全く無意味である，ということではない（足立ら，1985; 柴原，1988)。しかしながら，そういった経験が絶対的なものではない，換言すれば，生物学的な解発刺激として完全に機能し得るのではない，ということを指摘したいのである。

如何なる人間も，大きな環境の変化に対して即応できないのと同様に，出産経験を経たからといって，即座に母親役割を積極的に受容できるとは限らないことは上述した。もちろん，出産・育児に対する心理的準備を享受できる環境にある，という点では，妊娠期間は有意味である。しかしながら，母親を「発達する存在」として捉えてみた場合，母親の生育歴（小嶋，1989）や，育児過程で生ずる母子相互作用（小嶋，1988）の重要性が，当然，強調されることになるのである。その一方で，表面的には出産後ごく初期のうちに，多くの産婦は，育児環境をも含めた自身の置かれた環境に，一見即応しているかのように見える。このことは，妊娠・出産の経験が寄与しているとも考えられる。しかし，観点を変えれば，そのように振る舞わなければならないような抑圧や社会的圧力があり，このことが副次的なストレス因を形成しているとも考えられるのである。いわば「母性信仰」への産婦自身のとらわれ（大日向，1992）である。

本論における「感情の時系列的変容」とは，出産後からの産婦日記を資料に，初産婦3事例において確認された，産児や育児に対する感情が質的に変容していく過程

* 慶應義塾大学総合政策学部 Teaching Assistant（発達心理学）

についての考察である。産婦の心理状態としては，望んで出産した我が子といえども，常に肯定感情で満たされ続けている訳ではない。このことは，全ての母親や育児経験者が経験的に知るところである。程度の差こそあれ，またその時間の長短こそあれ，誰しもが経験したことがあろう。しかし，初産婦においては，育児の現実との遭遇に際して，妊娠以前及び妊娠期間中に描いていた理想的育児を実践する自己像とのギャップが大きく，また，経験要因の点からも経産婦よりも不利である，と考えられる。加えて，現代では，個人の生育史の中での，育児の観察学習の機会すら希薄である（巷野，1993）。そこで，本論では，初産婦の産後1年前後の期間に対象を絞り，個々の産婦のおかれている状況に即して，「時系列的」に考察を試みることにする。

方　　法

調査方法　本研究での分析対象は，初産婦 3 名（FN・YN・AK）の出産後からの日記資料と出産直後に実施した調査票（主に基礎的資料と出産時に関する質問）への回答結果である。何れの事例も，筆者の知人より紹介を頂いたものである。

基本的な手続きとしては，紹介を頂いてから，「研究協力依頼書」と「研究協力の是非についての返信用葉書」を送付し，研究協力の回答を受信後，電話にて研究協力を確認し，2〜3 ヶ月毎に日記のコピーを送付して頂くというものであった[2]。但し，FN については，産児が5歳のときに依頼し，受胎認知から産後 38 週までの記録全体を提供してもらったもの（筆者自身がコピー後返却）であるため，調査票への回答は回顧情報である。YN については，妊娠後期に依頼し，受胎認知からの記録とその後の日記を提供して頂いたため，産後の記録は，研究協力と同時進行であった。また，AK についても，妊娠後期に依頼し，その時点からの日記を提供して頂いているため，産後の記録は，やはり研究協力と同時進行であった（研究協力依頼以前の日記については協力が得られなかった）。

以上3事例に共通することは，何等かの形で自主的に記録をつけており，出産後も続ける意志のあったことである。しかしながら，YN・AK においては，研究協力が妊娠後期より同時進行であり，他人（筆者）に見せることを前提としている点を留意しておく必要があろう。即ち，記述内容に対するバイアスの問題が，全くないとはいえないのである。また，FN においては，その点の危惧はないものの，産児への将来の記念品としての意味合いがその日記内容に反映されていると考えられ，例えば，産児への語り口調で書かれていたことを付記しておく。記述内容の偏向への影響が考えられるのである。

分析方法　日記資料の分析方法であるが，本研究における日記資料は，全くの制限を設けずに収集されている[3]ため，まずその雑多な情報から，本論の主題である，産婦の産児への感情を表出していると考えられる記述を抽出することから始めた。その際，“うれしい”“腹が立つ”といった直接的な感情表出だけではなく，“…してくれた”“…してくれなかった”といったものも，感情の表れとして解釈し，分析対象の記述とした。

次にその抽出された記述を，その傾向から以下に掲げる3つの様相に，質的に分類した。

- Ua (Unconditional-acceptance)：産児の存在そのものに対する感情表出
- Co (Childrearing-oriented)：育児活動を通しての感情表出
- Do (Development-oriented)：産児の行動発達に対する感情表出

具体的な記述例としては，Ua：Y ちゃんは，どんどんかわいくなっていく（FN：2・6[4]）・大切な存在であり宝物（AK：1・1），Co：夜眠りについてくれるとホッと一息，明日こそいい子でいて（YN：14・2）・寝なかったりしたらもう腹が立つ（AK：3・5），Do：“おいしいよポーズ”をする様になった，それがとっても可愛くって…（FN：27・6）・つかまり立ちが上手になってきてまた一段と可愛くなってきた（YN：32・6），といったものが挙げられる。もっとも，この分類も明確になされ得るわけではなく，とりわけ Ua と Do の区別は，曖昧なものとならざるを得なかった。FN の抽出された記述を対象にした，筆者ともう1人の評定者との質的分類の一致率は 88.7% であった。

事　　例 1 (FN)

基礎的資料　東京都在住の 26 歳の主婦である。出産時，結婚後3年目の夫や義父母と同居をしていた。また，私信から，結婚直後より子どもを欲していた，という情報を得ている。妊娠 39 週 3 日に，3,600 g の女児を正常分娩で出産し，産後 0 週 6 日に母子とも退院した。産後38週2日にて日記が終っている。

短期大学卒業後，幼稚園教諭をやっていたが，妊娠以前に退職している（理由は不明）。今回の出産は，計画妊娠であり，妊娠したことに対して産婦自身も喜んでおり，夫も「嬉しそうだった」と述懐している。また，夫婦共

表 1　FN の感情の時系列的変容と日記における具体的記述例

週	質的分類 Ua	Co	Do	具体的記述（抜粋）	備考
0	●			私のかけがえのない赤ちゃんだ（出産当日）	母子同室開始（0・2）
1				（授乳に）ママとあなたが1つになっている（0・2）	退院（0・6）
2	●			Yちゃんはどんどん可愛くなっていく（2・6）	床上げ（2・6）
3					
4					
5	●			昼間はほとんど寝てくれない（5・6）	
6		●		朝でなく，夜寝て欲しいものだ（7・0）	
7	●	●		このままリズムが整ってくれるととっても助かる（8・2）	指しゃぶり（7・4） 喃語（8・2）
8		●		ぐっすりねんねで大助かり（8・4）	
9		●	●	夜7時位，寝てくれるので助かる（9・3）	
10				かなりぐずぐず言ってからでないと眠らないぐずら！（10・1）	
11	●	●		今はちょっぴり悪い子のYです（11・6）	
12	●	●	●	本当に機嫌良く遊んでくれてママはとっても助かる（12・6）	
13		●		明日こそいい子でいておくれ（14・2）	
14	●	●		手のかからないいい子でした（15・0）	人見知り（15・0）
15		●			玩具を口へ持っていってなめる（15・1）
16					
17					離乳食開始（18・2）
18		●			
19					
20			●	（寝返りに）とうとうです，Yはまた1歩成長しました（20・3）	寝返り（20・3）
21					
22		●		喜んで食べてくれるのでママとしては大いに助かる（22・4）	
23				（寝返りに）パパもママも大喜び（24・2）	
24			●	巧みに指を動かすのが素晴らしい（25・0）	
25			●		1人座り（26・0）
26		●		Yもワンちゃんスタイルを頑張っています（27・1）	突発性発疹（26・4）
27			●	（"おいしいよポーズ"に）それがとっても可愛くて（27・6）	おしりあげ（27・1） 指先の使用（29・1）
28					
29					
34				（ハイハイに）目が離せなくなるようで不安（35・3）	※この間に，ハイハイ，万歳をするようになる
35			●	離乳食3回は大変．お互いにしんどいみたい（35・4）	自分で座る・捕まり立ち（35・5）
36		●		機嫌良く遊んでくれたので大助かり（36・0）	
37	●			（拍手に）そっと箱の中にしまっておきたいほど可愛い（37・1）	
38					

注1：具体的記述や備考のあとの（　）内は，（産後週数・日）を表す（表 2・3 についても同様）．
2：質的分類の●は，それに分類される記述が，少なくとも1日はあったことを示す．但し，Co については，その記述日数が多いため，2日以上の記述とした（表2についても同様）．
3：Yは，産児のことを指す．

々，特に希望していた産児の性別はなかった（以上，調査票より）。

日記資料　表1は，本事例の産児への感情を，上述の分類に従って時系列的にまとめたものである。「質的分類」の項は，便宜上，週単位で表したが，同じ週において連続的に見られることもある。全般的特徴としては，Co

は日記全般に見られ，Ua・Do は，絶対件数自体が少ない点を挙げることができる。また，産後 1〜5 週・20〜24 週・30〜33 週には，日記が滞りがちであったことも併せて記しておく。

まず，Ua に関してであるが，産後 0〜7 週において優位であった。産後 1〜5 週の記録日数の少ない時期においても，Ua が記述されていることからも裏付けられる。この時期には，Co や Do は見られなかった。次に Co であるが，産後 5 週辺りから見られ始め，その後数週間にわたって続くことになる。しかしながら，肯定感情・否定感情の別に見直してみると，肯定感情(例えば，“昼間も良く寝てくれている (6・6)” や “午前中は本当にいい子でたっぷりおっぱいを飲んで一人で遊んで (12・4)” など) が，否定感情を大きく上回っていた。また，その対象を吟味してみると，産後 10 週辺りから，それまでの産児の睡眠に対してのものから，産児の機嫌に対してのものへと移行していた。Do に関しては，産児の行動レベル (とりわけ全身運動レベル) での発達の認知が引金となっており，産後 20 週辺りから次第に顕著になってきていた。主たる行動の初発は，表 1 の「備考」に示しておいた。

考察 産後 38 週間を概括すれば，産児への記念品的記述という特殊性はあるが，育児に対して，それ程の困難に直面することなく経過してきた事例と言えよう。この点について，いくつかの側面から考察してみる。

まず，本産婦のパーソナリティ特性の一端を，その日記内容から推し量ると，“(母子同室で) 30 分も泣き続けていたのに，ママは涼しい顔をして寝ていた (0・6)”“(入浴に) まだ慣れないので洗い残しがあっちこっちにありそうだが，まぁそこいらは目をつぶって勘弁勘弁 (2・6” といった記述から，楽天的でおおらかな一面を，見て取ることができる。

相互作用のもう一方の担い手である産児であるが，生活リズムは，産後 14 週の後半から，20 時前後に就寝し 6 時前後まで寝る，というサイクルができていた[5]。また，大病を患うこともなく，産後 26 週の突発性発疹以外には，産後 37 週に風邪の記述が見られるのみであった。授乳面においても，“今までの (離乳) 2 回食までがあまりにもスムーズだった… (35・4)” とあるように，本産婦にとって，育てやすい子どもであったと評価することができる。

次に，産婦を取り巻く社会的要因であるが，いくつかの点に論及しておく。まず，同居者についてである。夫については，入浴以外には，育児援助の記述がさほど見られないものの，“あんなに Y のことを愛してくれるパパ (2・6)” “パパがパーマをかけてきれいにしてこいと言うので… (6・5)” “ママの気持ちがパパがいるために穏やかになり，それが Y にも通じるのか… (8・6)” など，夫婦関係や父子関係に満足していたようである。また義母も，産婦が外出する際に産児の面倒を見ていた位で，育児に対して，とりわけ大きな役割を担っていた訳ではなさそうである。しかし，“おばあちゃんが，良い子だったりぐずぐずだったりしながら成長していくのよ…，と言っていたが本当でした (14・3)” とあり，家族成員が，産婦の精神的支柱の役割を果たしていたものと思われる。また，妊婦水泳の仲間や，同年齢の子供をもつ近所の友人達，近隣の人々との交流も盛んであったようで，この点においても，恵まれた環境下にあったといえよう。

事　　例 2 (YN)

基礎的資料 茨城県在住の 30 歳の主婦である。出産時，結婚後 2 年目の夫とのみ同居していた。当該出産の前年，妊娠 11 週で死産しており，計画妊娠ではないが今回の妊娠をとても喜んでいた。妊娠 38 週 4 日に，3,240 g の男児を出産し，産後 0 週 6 日母子とも退院後，実家へ戻り，産後 7 週 6 日に帰宅した。産後 1 年 38 週 2 日にて，次子妊娠のため日記協力終了となった (本論では産後 1 年までを扱う)。

高等学校卒業後，会社勤めをしていたが，結婚を機に退職した。妊娠したことに対し，夫も「嬉しそうだった」という回答を得ている。また，産婦自身は “親類の子供が男子多く” 女児を希望していたが，夫はどちらでもよかったようである (以上，調査票より)。

日記資料 YN の産後 1 年間については，以前に，育児への適応という観点から，「疑似安定期→不安定期→安定期」といった様相を考察した (柴原，1992)。本論では，より具体的に分析をすすめているわけであるが，Ua→Co→Do といった傾向を，概ね対比させることができる。即ち，里帰りからの帰宅 (7・6) 前後の疑似安定期では Ua が，ノイローゼの記述 (22・6〜23・1) 後までの不安定期では Co が，そして，それ以降の安定期では Do が優位となっていたのである (表 2)。この点を踏まえて，少し具体的に見ていくことにする。

まず Ua であるが，産後 1〜10 週 (産後 0 週の記録はない) に顕著であった。本事例は，産後 7 週 6 日まで実家で過ごしていたことから，この時期は，帰宅前後の時期にあたる。次に Co であるが，産後 5 週辺りから見ら

表 2　YN の感情の時系列的変容と日記における具体的記述例

週	質的分類 Ua	Co	Do	具体的記述（抜粋）	備考
0				子供の顔を見るたび幸せ (1・0)	退院→実家へ (0・6)
1	●			(げっぷに) お話したように感じ嬉しかった (2・2)	発声 (2・2)
2	●			本当に毎日の成長が楽しいです (2・5)	
3	●			目が合うようになって可愛らしくなってきた (3・1)	
4				(睡眠に) 淋しい，もう少し遊んで欲しかった (5・4)	
5	●	●		もう少し泣くのが減ると良いのですが (5・5)	
6	●	●		声を出すとすごく嬉しくて可愛くてたまらなくなる (6・3)	
7					実家→帰宅 (7・6)
8	●			笑ってくれるともう幸せ，抱きしめたくなる (8・3)	
9	●	●		あまり手を煩わせず寝てくれている (8・4)	
10	●			泣きっぱなし，夕食も 9：00，疲れた (10・4)	
11		●		どうもよその家に行くと寝てくれない (11・5)	
12				果汁みかんをおいしそうに飲んでくれた (13・1)	
13		●	●	物をくわえようとする考えができたみたく嬉しい (13・4)	口に物を持っていく (13・4)
14	●			良く寝てくれてあまり手がかからなかった (15・2)	笑顔に声が伴う (15・3)
15		●	●		
16		●		すごくぐずって困りました (17・0)	離乳食開始 (17・4)
17		●		大変手がかかった 1 日でした (18・2)	人見知り (18・0)
18		●	●	前下右側の歯が完全に出てきた，すごく毎日楽しみ (19・0)	歯が生える (19・0)
19		●	●	長く寝てくれて嬉しいです (19・5)	
20		●	●		
21				いつも起きていて何もできず子守になってしまう (22・0)	寝返り (22・1)
22		●		ノイローゼになっている (22・6～23・1)	
23		●	●	ハイハイを数多くし出した，大変嬉しい (23・5)	ハイハイ (23・5)
24		●		睡眠・ミルクと規則正しく良い子でした (24・4)	
25		●			
26		●		夕方から夜にかけ，すごくぐずり困った (26・3)	
27				初めて捕まり立ちを目撃，自分で見たので私も感激 (28・0)	捕まり立ち (28・0)
28		●	●	乳首を口に入れるとそのまま寝るようになりとても楽になる (29・2)	
29					
30					
31		●		そばにいないと駄目になってきた，何もできない (31・4)	1 人立ち (31・6)
32	●		●	捕まり立ちが上手になってきた，また一段と可愛くなってきた	寝言 (32・6)
33			●	(32・6)	突発性発疹 (33・3)
34					
35			●	歯がまた 1 本増えました，嬉しいな (35・1)	
36					
37					
38			●	イナイイナイバーができ，大変嬉しい (38・2)	
39		●		お昼寝をたくさんしてくれて大助かり (39・5)	
40		●	●	食べ物を見ると絶対食べたがりきりがなくて困る (40・3)	
41					
42				遊び方も 1 歩 1 歩大人になっているように見える (43・1)	
43			●	動きも言葉も上手，活発になり忙しくなりそう，でも楽しい (43・3)	障害物をよける (43・2)
44		●	●		2・3 歩あるく (43・4)
45					
46		●		子供が寝てくれないと親はゆっくりしないものだ (46・6)	
47					
48			●	自分の気持ちをはっきりと意志表示するようになった，大変そう (48・4)	
49					
50					
51					
52					

れ始め，産後 28 週あたりまで，とりわけ産後 15～26 週では，かなり頻繁にその記述を確認することができた。この時期は，ちょうどノイローゼの訴えが見られた時期であった。肯定感情・否定感情の観点からは，全般にわたって，やや否定感情の記述の方が多く見られた。また，その対象の観点からは，時期による変化は見られず，睡眠や機嫌に対してのものが中心であったが，その他，授乳や離乳などもその対象となっていた。そして，Do についての記述であるが，産後 13 週辺りから見られるようになり，その後，断続的に確認することができた。その対象としては，全身運動レベルから手指の動き，歯が生えたこと，知的発達など多岐にわたっていた。

考察　YN の産後 1 年間での特徴としては，産後 22 週前半～23 週後半にかけての，ノイローゼの記述が挙げられる。客観的には軽度の鬱状態と考えられるが，ここで重要なのは，客観的診断ではなく産婦自身の認識（"自分でノイローゼになっているのが分かっている (22•6)"）であり，その意味でも「ノイローゼ」は，本事例にとって，危機的状況であったと考えられるのである（"何に対してもイライラ怒りたくなる。子育てには自信がなく，家事も全く自信がなくなる (23•0)"）。この点を踏まえて，YN の産後 1 年間を考えてみる。

まず，本産婦のパーソナリティ特性であるが，非常に几帳面で神経質，潔癖症といった点を挙げることができる。例えば，"うんちも今まで初めて出てくれないの，どうしよう (8•0)" "（お宮参りに）準備に手落ちはないかどうかと…今の私は子育てで頭一杯なのに (13•5)" "（友人の来訪に）掃除できずそのうち来客。食事も手料理できず，午後からイライラ (15•0)" "便がなく食べさせるのはイヤな気がする (19•6)" といった，具体的な記述内容から推察することができる。本事例に対しては，2 ヶ月毎の日記送付をお願いしたのであるが，毎回，送付遅延なく送って頂けた。この事実も，本事例の几帳面さを裏付けるものであろう。また，"毎日便の出を心配している私 (19•5)" "ミルクの飲みが悪く…市役所の保健係にも相談に行ったり一苦労でした (18•3)" などの記述から，育児不安の高さを確認することができる。

一方，産児についてであるが，生活リズムとしては，産後 30 週頃から，20 時前後に就寝して 7 時前後まで寝る，というサイクルになってきていた。この頃から Co の記述が減り始めたことは，注目に値する。本産児の場合，排便や授乳などの育児行動の面では，本産婦にとって，決して育てやすい子供ではなかったと思われる。また，肥満気味であったことが，本産婦の精神的圧力となっていたのである（"（4 ヶ月検診で）太りすぎ注意の様子。私は一悩み (16•4)" "定期検診で…体重は 90% 以上で身長は中間，バランス悪し (22•2)" "（育児教育のセールスマンから肥満気味なので医者に相談するように言われ）すごくすごく苦しくどうして良いかわからなく胃が縮む思い (22•5)"）。しかし，産児の健康面においては，産後 33 週に突発性発疹，産後 27•36•45 週に風邪を患った程度であった。

次に社会的要因であるが，夫に対しては，決して肯定的であったとはいえない。退院後の実家滞在中は，訪ねて来る夫に対して，"パパの子煩悩さに安心しました (6•0)" といった肯定感情を抱いていたのであるが，帰宅後の記述は，"パパさんが起きても何 1 つお手伝いをしてくれずイライラ (9•6)" "この休みもパパさんはあまり子守をしてくれず私はすごく大変 (22•0)" "今日から 3 日間パパさんが家にいる。とっても心が重い。2 人子供がいることになる (29•6)" と否定的なものが多く見られたのである。子供を入浴させたり，外出時にだっこをしたりという事実はあったのだが，充分なものではなかったか，産婦の要求に合致したものではなかったか，何れにしても産婦にとって，満足のいくものではなかったようである。このことを「里帰り分娩」のみの影響とみる訳にはいかないが，大村 (1990) が指摘するように，里帰りからの帰宅後の充分な検討が必要である。また，本産婦の場合，近隣との相互交渉の記述があまり見られず（双方の実家への行き来は比較的あったようだが），日常的には，孤軍奮闘といった印象を強く感じさせるものであった。

最後に，ノイローゼについて，若干の考察を加えておく。本事例の状況を略述すると，几帳面な性格で，育児不安が高く，育児・家事に対して潔癖傾向が見られた。加えて，夫からの援助行動に満足感を持ち得ず，また，産児の肥満という問題を抱え，産後 22～23 週には，育児ノイローゼを訴えていた。しかしその後，"離乳があまりすすまず困ったが，無理に食べさせなかった (28•1)" "かわいそうなことをしてしまった。たまにはいいか (38•4)" といった，「臨機応変さ」やいい意味での「適当さ」を身につけ，また，ノイローゼをきっかけに夫との対話を持ち得た（その後も夫に対する不満は散見できるが）ことにより，さらに，Do の頻度の増加に見られるように，産児の発達を主にその全身的行動から確認できたことにより，危機的状況を克服していったものと思われる。肯定感情であろうと否定感情であろうと，Coの頻度の減少が，このことを示唆している。

事　　例 3 (AK)

基礎的資料　大阪府在住の 30 歳の主婦である。出産時，結婚後5年目の夫とのみ同居していた。当該出産の2年前，妊娠2ヶ月で流産を経験しており，今回の妊娠は，計画妊娠であった。妊娠 41 週 4 日に，3,600 g の男児を出産したが，産児の内分泌系の先天性疾患（AK の希望により病名は明記できない）により，約2ヶ月間母子とも入院していた。その後実家へ戻り，約3ヶ月間（産後約5ヶ月まで）滞在後帰宅し，夫との3人での生活を始めていた。産後2年以上経過しているが，現在も研究協力を得ている。

短期大学卒業後，26 歳で結婚し，それ以来就職しており，妊娠中も継続していたが，出産後は在籍ながら休職状態になっていた（その後退職した）。妊娠に対して，夫は「私以上に喜んでいた」と認知していた。夫婦とも，特に希望する性別はなかった。先天性疾患については，薬服用，通院加療は必要なものの，日常生活には全く影響がない，との報告を受けている（以上，調査票と私信より）。

日記資料　本事例は，他の2事例とは若干異なる傾向を示していた（表3）。即ち，産後数週間の Ua の多さと長期化，Co の少なさ，Do の多さ，である。ただ，産後 9～25 週の間は，殆ど記述がなかったこと，全体的に断続的な資料であったことに留意しておく必要がある。また育児環境も，産児の問題に起因して，一般的な形態ではなかったこと（長期入院・長期里帰り）を，客観的事象として提示しておく必要があろう。

まず Ua についてであるが，“大切な存在”“宝物”“可愛くて仕方がない”といった表現が数多く見られた。とりわけ，産後 1～10 週においては顕著であった（産後0週の記録はない）。Co の記述は殆ど見られなかったのであるが，他の2事例同様，疲労感，睡眠不足の記述は，頻繁に見られた。しかしながら，その訴えの際，産児に言及されることは稀であったのである。そして Do であるが，発達についての記述には，例えば，寝返り (24•0)，ハイハイ (27•4)，つかまり立ち (34•3)，発語 (42•0)，模倣 (47•5)，といったものがあった。他にも，追視，微笑み等，肯定感情を伴っての記述が多く見られた。但し，これらの産後週日数は，記述内容から見る限りにおいては，必ずしも初発を表しているわけではなかったようである。

考察　本事例の場合，産児の先天性疾患による長期入院という環境下で，育児がスタートした。産後2週1日には，“産むときとてもつらくて，もう子供もどうでもいいと思った。それがとても心が痛い”と記されており，産後数週間，及びその後の産児に対する感情に，補償的に影響を及ぼしていたのかも知れない。産後約1年経過した時点でも，“もって生まれた体質，これさえなければと産んだことも悔やんだり，しかし，この可愛いTがいないと思うとそれも考えたくない (49•2)”とある。概括すれば，本事例の産後1年間は，ことあるごとに，産児の先天性疾患とそれに対する自責の念や今後の不安に満ちていたのではないか，と推察し得る。

本産婦のパーソナリティ特性であるが，やや神経質な一面が想起される。“T が泣くとすぐに2階の部屋に行き抱きかかえてしまう。だからいつも耳をすましている (9•4)”ような状況であった。もちろんこういった神経質さには，産児の先天性疾患という要因が寄与していることは，充分に考えられる。しかし，頻繁に“イライラしないよう”“気長に”といった言葉が見られる点や，“甘やかしてはいないか，放任過ぎてはいないか，御飯はこれでいいのか，本当に手探りの毎日 (30•5)”といった記述から，それだけではないようである。ただ，“T の遊ぶところへ行って仲間に入れてもらう時間が多い (38•4)”といった，外向的な一面があることも見逃せない。

産児については，先の2事例のようなタイムスケジュールの記録があるわけではないが，養育上の問題は見られなかった。“T はどちらかと言えばおっとりしている分，今は育てやすい (24•0)”ようで，“近所の人みんなが T ちゃんはしやすいなぁと言ってくれる (45•5)”のであった。また，産児の抵抗力が弱い分，健康面にはかなり神経を遣っていたようであるが，ここまで問題なく経過してきた点も鑑みると，先天性疾患の問題は別にして，育てやすい子供であった，と評価することができる。

社会的要因のうち，夫については，母子入院中及び産婦が実家滞在中は，訪ねてきた夫に対して，“とても嬉しかったし，やっぱり話相手がいてるのといてないのでは全然疲れ方が違う (4•6)”といった記述に代表されるように，その存在に精神的安定の源を見い出していた。しかし，産婦の帰宅後，即ち親子3人の生活が始まってからは，数回の夫婦喧嘩以外には，感情表出を伴った記述は殆ど見られなかった。一方，近隣との関係については，近所付き合いも円滑であり，“こんなに子供が多いところもマンションじゃないのにとてもいいこと (38•4)”“近所の人と話をする。それが私のストレスの解消なのかも知れない (52•3)”とあるように，母子双方にとっ

表 3　AK の感情の時系列的変容と日記における具体的記述例

週	質的分類 Ua	Co	Do	具体的記述（抜粋）	備考
0					退院（0・6？）
1	●			とても大切な存在であり，私の宝物です（1・1）	先天性疾患の通告→母子も再入院（2・1？）
2	●			Tは可愛くて仕方がない（2・1）	
3	●	●		夜中寝なかったときは，本当にノイローゼになりそうだった（3・3）	
4	●	●		顔もすごくいい顔になっているので嬉しい（4・6）	
5	●	●			
6	●				
7	●				
8	●			この子人より早いとか，フッと思ってしまう（8・1）	退院→実家へ（8・3）
9	●			こんなにわが子が愛らしいとは思わなかった（9・4）	
10	●			この子はとても賢いのではないでしょうか（10・6）	
11					
12					
13					
14	●			寝ている姿を見ると本当に愛らしくなる（14・4）	
15	●				
24	●		●	おっとりしている分，今は育てやすい（24・0）	※この間に，実家→帰宅
25			●	1日1日変化するわが子，毎日がとても楽しみだ（25・6）	※この間に，寝返り，など色々なことができるようになる
26					
27	●		●	少し前へ進むようになり，2人で喜ぶ（27・4）	
28		●			ハイハイ（27・4）
29			●		
30	●	●	●	ハイハイするのもとても速くなり，とても喜びでそして自慢である（30・5）	
31			●		
32	●		●	小さい白い歯がそれはそれは可愛らしく（32・0）	歯が生える（32・0）
33		●		よく寝てくれるので嬉しい（33・2）	1人座り（32・4）
34			●		捕まり立ち（34・3）
35			●	知恵がついてきたのが日々に分かり楽しみ（35・5）	
36	●			成長していくTを見ているととても楽しみ（36・6）	
37					
38	●	●	●		
39	●			Tがおるだけで，これほど人生が楽しく変化があるとは思わなかった（39・2）	
40					
41	●		●	やっとバイバイをするようになり嬉しい（42・2）	1人立ち（41・3）
42		●	●		
43	●	●		寝る前が少し大変だ（43・6）	
44					
45		●	●		
46		●	●	ときには4時半頃起きるT，やめて欲しい（46・5）	5・6 歩あるく（46・5）
47		●	●	ときどき夜中に起きてくるので身体がしんどい（47・3）	模倣（47・5）
48	●			私の真似はいろいろするので嬉しい（47・5）	
49		●	●	この頃は会話ができてなんか嬉しい（49・5）	
50	●			Tを見ていると嬉しくて仕方がない（50・3）	
51					
52	●		●		

注1：本事例に関しては，Co についても，1日だけの記述でも●を記した．それは他の2事例に比して，記述件数がとりわけ少なく，1週間に2度見られることがなかったからである．

2：Tは，産児のことを指す．

て，恵まれた環境にあったものと推察され得る。

Klaus & Kennell (1976) は，先天性障害に対する親の反応には，1 ショック，2 否認，3 悲しみ・怒り・不安，4 適応，5 再起，という段階があることを指摘している。本産婦の産後数週間においても，"今日ほどつらいと思ったことはなかった。まさか検査の間違いであると今も信じている (1•2)" "自分だけがこの世の中で一番辛いのだと思うぐらい辛い日々が続いた。産むときとても辛くてもう子供もどうでもいいと思った。それがとても心が痛い (12•1)" "今からのこと考えたら不安になるが，前向きにいかなくては (3•3)" "まだまだ大変な子供は沢山いるのだから私はやっぱり神様に感謝しなくては，しかしそう思う心になるには少し時間がかかりそう (3•5)" といった記述が，見られた。このような反応が，産児に対する感情（本事例の場合は，Ua の多さと Co の少なさ）に多大の影響を及ぼすであろうことは，容易に察することができる。

ただ，本事例に関しては，日記が途切れがちであった時期が，Co の増大が予想される時期であることを考慮する必要がある。この産後 9〜25 週を，多忙と疲労の時期（丁度この間に実家から帰宅している）と推察すると，やはり，他の 2 事例と同様の感情の変容傾向を認めることができるのである。

総合的考察

本論では，産児に対する感情という観点から，産婦の産後 1 年間を捉えてみた。本論で扱った事例から，それほど明確ではないが，概ね Ua→Co→Do といった流れが認められたのである。この傾向は，出産を成し遂げた功労者の立場（上田，1981）から育児をする者の立場への移行 (Ua→Co)，そして，ある意味で盲目的に育児をする立場から育児による成果を評価し得る立場への移行 (Co→Do) を，反映していると考えられる。

このような変容傾向は，ある意味で，産婦の関心対象の移行を示している，とも理解することができる。その日その日の印象的なことが，何等の制約なしに綴られるというのが，日記資料の特徴であるからである。即ち，待ち望んだ出産を経て，我が子を目の当たりにした興味と幸福感から，初めての育児労働に直面しての不安や疲労，睡眠不足の訴えへ，そしてそのようなストレス因のために，目に止まりにくかった産児の確実な発達への気付きへの移行である。例えば，"ミルクを飲んだらすぐ寝てしまったのでチョッピリ淋しい。もう少し遊んで欲しかった (YN: 5•4)" のが，"子の親というものはあまり顔を見ていない気がする。周りのこと，子育てだけで，ゆっくりと顔をうかがう暇がない (YN: 43•5)" 状態になっていくのである。もちろん，この背後には，産児の発達だけでなく，産婦の側の育児への習熟などが，関与していることであろう。

また，個々具体的な記述に着目した場合にも，各事例間に，次のような共通点が見い出された。第 1 に，母親の「分離不安」である。FN においては，"(夫婦でピクニックに) Y のことを思い出し早く帰りたくて仕方がなかった。…楽しんでいれなかった (10•3)"，YN においては，"(夫婦でショッピングに) S のことも気になった自分のこの思いが不思議 (3•6)"，というのである。外出時に産児を心配する記述は，この他にも見られた。AK においては，母子の長期入院（母子同室）が原因で分離体験がなかったためか，この種の記述は見られなかった。しかし，このような傾向は，"昨年の暮れから 3 日まで，パパとママでスキーへ (FN: 30•2〜30•5)" "私と夫と楽しく東京に出ておいしいものを食べ，ルンルン気分で帰って来ました (YN: 13•0)" とあったように，永続するわけではなく，むしろ，産後ごくわずかの期間にだけ，見られたのである。そして，第 2 の共通点として，「密着拒否」の傾向が現れてくる。"どうも抱いてもらいたいらしい。放っておきたいのに (FN: 10•5)" "私がいない様子が分かるみたいで，嬉しいけどこれから大変 (YN: 10•3)" "ピッタリそばにいないと駄目になってきた。人見知りはしないが 2 人の時は何もできない (YN: 31•3)" "眠くなると私を探しそして泣く。私がいると安心するのかなぁ。嬉しくもあり少し大変だ (AK: 28•6)" といった記述に代表される。しかし，「密着拒否」といっても，産児の存在そのものが拒否されているのではないことは，強調される必要があろう。こういった反応は，産児に密着されることによる家事労働への影響，さらには「抱き癖」への危惧などを起因としていたようであるが，産婦自身の疲労や睡眠不足も関わっていた，と解釈し得る。その意味からすれば，このような状態が長期化した場合，「育児拒否」へと発展する可能性は，充分に考えられるのである。

第 3 には，「行動発達に対するアンビバレントな反応」である。産児の行動発達（とりわけ粗大運動）は，産婦のみならず，周囲の者にとっても，大きな喜びの対象の 1 つであろう。しかし，少なくとも産婦においては，喜びだけに満たされているわけではない。"これで寝返り，ハイハイが始まったら，と思うと今からゾーとしてしまう (FN: 14•5)" "(ハイハイに) 喜びの反面，だんだん目

が離せなくなるようで不安もちょっぴり (FN: 35•3)" "(一人立ちに) 今でさえチョコチョコ大変なのに，もっとこれ以上に大変だと思うと気が遠くなりそう (YN: 40•4)" "捕まり立ちをするようになり目も離せない毎日で，とっても体が疲れる (AK: 34•3)"，というのである。このような反応は，現実の育児状況を考えれば，至極当然のことのように思える。時期的には，育児労働が軽減されているわけではなく，疲労や睡眠不足の訴えがやはり優勢な時期であるからである。以上指摘してきた3点は，前述の Ua, Co, Do に対応づけることが可能である。

一方，当然のことではあるが，事例による相違があることにも，留意しておかなければならない。全般的に FN と YN の間には，非常に類似した変容パターンが認められたのであるが，Co の継続期間，Co の記述対象，肯定感情・否定感情の観点から捉えた場合の，それぞれのパターンの違い（具体的には，それぞれの考察の項を参照）には，興味深いものがあった。総じて，FN の方が，心理的に安定を示していたと推察できる。産児の側の要因としては，FN の産児の方が，生活リズムの固定化が早く，また，記述対象に方向性が見られたことから，産婦にとっては育児に対する予測性をもち得た点，そして，肯定感情が優位であった点が挙げられる。一方，産婦の側の要因としては，その性格特性や夫に対する感情，生活環境などの点を列挙することができる。もちろん，産児の要因として挙げたものも，産婦との複雑な相互作用の結果，といった側面があることは否めないし，また，産婦に無意識的に影響を及ぼしている，産児側の要因・社会的要因もあろう。その意味からも，上述のような相違と，YN に見られたノイローゼの自覚との関連についての安易な言及は，避けられるべきであるが，今後の課題として提出しておく価値は，充分にあると思われる。

最後に，将来的に必ず出てくるであろう「教育」の問題に，言及しておく。本論で扱った3事例においても，しつけ，知育，情操教育といったことへの関心を示す記述が，散見された。例えば，YN や AK においては，"(障子破りに) この時期叱っていいのか悪いのかよく分かりません (YN: 40•0)" "(いたずらに) 何回もするので，手を叩こうかと思ったが，少し考えてしまう (AK: 27•4)" といった記述が見られた。また，FN においては，産後 37 週 2 日に，"Y のためにクラシックでも聞かせて情操教育でもと張り切っている" とあり，AK においては，"本でも買って家におる時間が長いのでなんか勉強でも，なんて，親ばかになりそうだ (49•3)" とあり，産後 60 週 6 日からは，幼児教育の教室に通わせることとなったのである。産婦の産児に対する感情も，社会化の枠組みの中でさらに複雑化，多様化していくものと考えられる。

註

1) 本論は，筆者の日本発達心理学会第4回大会発表 (1993) における発表内容に，加筆・修正を施したものである．
2) コピーの郵送というのは，筆者からの要請ではなく，本研究の対象者が自主的に採択した方法であった．筆者が他に入手している事例の全てに共通する方法論ではない．
3) 研究協力依頼のインストラクションは，「妊産婦に対する心理学的研究」であり，「心理学的」以外には，具体的な分析対象・目標については，一切言及されていない．それは本研究が，妊産婦の心理学的生活を総合的に把握する，という目的で実施されているからであり，記述対象が，意図的に産児に絞られることを忌避した結果である．
4) 以下，具体的な日記記述内容の後の（　）内の数字は，(産後週数・日) を表す．
5) FN は，産後6週5日より，日記の横に産児のタイムスケジュールを記録していた．また，次の事例である YN も，出産直後より同様の記録を残していたが，何れも，筆者が依頼したものではなかった．

引用文献

足立智昭・村井憲男・岡田　斉・仁平義明 (1985)．母親の乳児の泣き声の知覚に関する研究．教育心理学研究，33，2，146-151．

Klaus, M. H. & Kennell, J. H. (1976). Maternal-infant bonding. The C. V. Mosby Company (竹内　徹・柏木哲夫訳 (1979)．母と子のきずな．医学書院)．

巷野悟郎 (1993)．現代子育ての問題点．周産期医学，23，6，769-771．

小嶋秀夫 (1988)．親となる心の準備．繁多進・大日向雅美 (編著) 母性．新曜社，75-96．

小嶋秀夫 (1989)．養護性の発達とその意味．小嶋秀夫 (編) 乳幼児の社会的世界．有斐閣，187-204．

大日向雅美 (1992)．母性は女の勲章ですか?．産經新聞社．

大村　清 (1990)．里帰り分娩-社会的事項を中心に．周産期医学，20，1，59-64．

ペリネイタルケア夏季増刊号 (1986)．妊産褥婦の心理．メディカ出版．

柴原宜幸 (1988)．妊娠後期から産後在院期間にかけての妊産婦の心理的変容．慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要，28，115-122．

柴原宜幸 (1992). 初産婦における育児に対する適応. 日本発達心理学会第3回大会発表論文集, 106.
柴原宜幸 (1993). 初産婦の我が子に対する感情の質的変容. 日本発達心理学会第4回大会発表論文集, 304.